

“社会を明るくする運動” 作文コンテスト  
奨励賞〔更生保護法人豊洲保護会理事長賞〕

「思い込みで始まる差別」

くす星翔中学校 二年 佐藤 由依

私は、「犯罪をおかした人は、悪い人だ。こわい人だ。」と決めつけていました。

しかし、その考えは、間違っていたこと、また、それが差別につながっていたことに気付かされました。

きっかけは、学校で一学期に行った人権学習のときでした。ゲストティチャーとして保護司の方が来られました。私は「保護司」という言葉をその時初めて知りました。

保護司とは、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える民間のボランティアだそうです。

調べてみると、保護司法という法律に基づき、法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員とされていますが、ボランティアなので給料は出ないそうです。

保護司は、保護観察に当たるほか、犯罪をおかした人が刑事施設や少年院から社会復帰を果たした時スムーズな生活ができるように、住居や就職先などの帰住環境の調整や相談も行っているそうです。

このような保護司は、全国に約四万七千人もいるそうです。私は、給料をもらわずにこんなにもたく

さんの人が保護司のボランティアをしていることを知って、とても驚きました。

私は、保護司の方の話を聞いて、二つのことを知りました。

一つ目は、犯罪をおかした人にはその人だけのせいではない人もいるということです。

犯罪自体はもちろん悪いことだけど、すべての人が最初から悪いことをしようと思っただけではないということだからです。なかには、自分が生きるためにどうしようもなく、それが悪いことだと分かっていても、犯罪をおかしてしまった人や、つい魔がさしてしまっただけで、とても後悔している人もいることが分かりました。

二つ目は、自分のしてしまったことを反省して、罪を償いたいと思っただけでも、犯罪をおかしてしまったことで、周りの人から差別的な見方や接し方をされて、社会復帰できず自分の居場所がなくて、再犯をおかしてしまう人もいますということです。

一度誤って犯罪をおかしてしまったために、周囲の人が犯罪者は悪い人だという見方をしてしまい、その人の人生が大きく変わってしまうことにとっても驚きました。

今までの私も自分が気付かないうちに、きっと差別的な見方や接し方をしていたんだと思います。

私も「決めつけ」や「思い込み」で、周りの人を

見ていることがありました。

例えば、「犯罪をおかした人は悪い人だ。こわい人だ。」と決めつけていたことや、「障がいのある人はかわいそうな人だ。」と思っていたことなどです。

どんな人もそうなりたくてなったのではないから、その背景や原因を知り、これからどうすればよいかをみんな考えてやることや、同じ人間として接することの大切さを今回学ぶことができました。

また、保護司の方のように困っている人が立ち直れるように支えている人がたくさんいることも分かりました。

これからは、たくさんの人と接していく中で、「決めつけ」や「思い込み」で人を見るのではなく、その人の「今」を受け止め、その人の気持ちを知り、自分と同じ人間として、平等に接することが大切だと感じました。

また、その考えをできるだけ多くの人に広めていくことで、少しずつ差別をなくせるような取り組みをしていきたいです。

そして、これまで以上に、もっとたくさんの人と関わりを持ち、いろんな人の気持ちや考えを知っていききたいです。